高等小學

新體讀本

卷六

375.9
Ki14
資料室

30220
教科書文庫
3
810
32-1894
200030
1452

明治廿七年十一月八日
文部省檢定濟

高等小學新體讀本

卷六

資料室
375.9
K114
廣島大學圖書之印
廣島大學
23769

目次

第一課　鵜越　平家物語　一
第二課　佐藤嗣信　同上　四
第三課　世界一周　第五　六
第四課　世界一周　第六　十二
第五課　なぼれれんぼなばるゼ　十六
第六課　世界一周　第七　二十三
第七課　霧雨ト暴風　二十八
第八課　世界一周　第八　二十九
第九課　豐太閤　三十三
第十課　楠正成ノ勤王　原漢文　頼山陽日本外史　三十七
第十一課　忠君　三十八
第十二課　熱　四十
第十三課　蒸氣機關　四十二
第十四課　おにむすあつゼ　四十四
第十五課　輸出輸入　四十八
第十六課　租稅　五十
第十七課　地方自治　五十三
第十八課　千劒破の城攻　第一　太平記　五十五
第十九課　千劒破の城攻　第二　同上　六十

第廿　課　年の末　貝原篤信―樂訓　六十二
第廿一課　冬　凡河内躬恒　六十三
第廿二課　京傳　六十四
第廿三課　馬琴　六十五
第廿四課　春日田舍の景　澁澤馬琴　玉石童子訓　六十七

東京帝國大學圖書之印

高等小學

新體讀本　卷六

第一課　鵯越

大將軍義經一萬餘騎を二手に分ち、賓平に七千餘騎を差し副へて一の谷の西木戸口に差し遣はす。吾が身は三千餘騎にて、一の谷の後鵯越を落さんとて、丹波路より搦め手へとぞ向はれけれ。兵共「是は聞ゆる惡所にてあるなり、同じく死ぬるとも敵に逢ひてこそ死にたけれ、惡所に落ちては死にたからず。あはれ此の山の案内者や、ある。」ト口々に申しけり。

茲に武藏の國の住人平山武者所進み出でて「奉重こそ此の山の案内善く存知仕りて候へ。」と申しければ、御曹司「和殿は東國育ちの者の、今日始めて見る西國の山案内者大いに誠しからず。」と宣へば奉重重ねて申しける「こは御詞とも覺え候はぬ者かな。旁野初瀨の花をば見ねども歌人が知り、敵の籠りたる城の後の案内をば、剛の武者が知り候ふ。」とぞ申しける。是れ又傍若無人にぞ聞えし。　又武藏の國の住人別府小太郎清重とて生年十八歳に成りけるが、進み出でて申しける「父にて候ひし義重法師が教へ候ひ

しは、『磐へは山越しの狩をせよ、又は敵にも襲はれよ、深山に迷ひたらんずるときは、老馬に手綱結びて打ち懸け先に追ひ立てゝ行け、必道へ出でんずるぞ。』とこそ教へ候ひしか。」と申しければ、御曹司「優しうも申したる者かな。『雪は野原埋をむとも、老いたる馬そ

道は知る。」と云ふ例しあり。」とて白草毛なる老馬に鏡鞍置き、白轡はけ手綱結びて打ち懸け、先に追ひ立て、未だ知らぬ深山へこそ入り給へ。

頃は二月初の事なれば、嶂の雪むら消えて花かと見もる所もあり、谷の鶯音づれて霞に迷ふ所もあり。登れば白雪皓々として聳え、下れば青山峨々として嶂高し、松の雪だに消えぬらで苔の細道幽かなり。蠱にたぐふ折々は、梅花とも亦疑はれ、東西に鞭を揚げ駒を早めて行く程に、山路に日暮れぬれば、昏下り居て陣を取る。

茲に武藏坊辯慶或老翁一人具して參りたり。御曹司「あれは如何に。」と宣へば、「是は此の山の獵師にて候ふ。」と申しければ、

「さては案内善く知りたるらん。」

「拿でか存知仕らでは候ふべき。」

御曹司「さぞあらん。是より平家の城郭一の谷へ落さんと思ふは如何に。」

「もめ〳〵叶ひ候ふまじ。凡三十丈の谷、十五丈の岩さきなどをば容易く人の通ふべき様も候はず。其の上城内には、落穴をも掘り菱をも植ゑて

待ち参らせ候ふらん。まして御馬なぞは思ひも寄り候はず。」

と申しければ、御曹司、

「さて左様の所は鹿は通ふか。」

「鹿は通ひ候ふ。世間だに暖かに成り候へば、草の深きに臥さんとて、播磨の鹿は丹波へ越え、世間だに寒くなり候へば、雪のあさみに食まんとて、丹波の鹿は播磨の印南野へ越え候ふ。」

とぞ申しける。御曹司、

「さては馬場ごさんなれ。鹿の通はんずる所を

馬の通はざるべき様やある。さらばやがて汝案内せよ。」

と宣へば、

「此の身は年老いて如何にも叶ひ候ふまじ。」

と申す。

「さて汝に子は無きか。」

「候ふ。」

とて、熊王とて生年十八歳に成りける小冠者を奉る。御曹司やがて髻取り上げさせ給ひて、父をば鷲尾莊司武久と云ふ間、是をば鷲尾三郎義久と名乗らせて、

一の谷の先陣たせ、禁内者にこそ具せられけれ。平家亡び源氏の世に成りて後、鎌倉殿と中違ひて奥州へ下り、撃たれ給ひしとき、鷲尾三郎義久と名乗りて一所に死にける兵なり。

平家物語

第二課　佐藤嗣信

能登殿「舟軍ハヤウアルモノゾ」トテ、ワザト直垂ヲバ着給ハズ、唐巻染ノ小袖ニ黒糸オドシノ鎧ヲ着、五枚甲ノ緒ヲシメテ、三尺五寸ノイカ物作リノ太刀ヲ佩キ、二十四指シタル大中黒ノ矢、頭高ニ負ヒナシ、重

籐ノ弓ノ真中取テ、源氏ノ大將ヲ射落サントゾ窺ハレケル。

能登殿ハ聞エタル大力強弓精兵、矢継早ノ手キヽニテオハシケレバ、判官ヲ其ノ矢先ニ懸ケ奉ラジト、源氏ノ兵共矢表ニ馳セ塞ガリテゾ戦ヒケル。能登殿「大將ノ前ナル雑兵共見苦シ、ノケヤ」トテ指シツメ引キ詰メ散々ニ射給フニ、究竟ノ武者五騎射落サレニケリ。中ニモ判官ノ身ニモ代ヘテ思ハレケル奥州ノ佐藤三郎兵衛次信ハ、黒皮オドシノ鎧ヲ着、草毛ナル馬ニ乗リテ、判官ノ御前ニむずト塞ガル所ヲ、鎧

ノ引キ合ハセ後ロヘウト射出サレテ真倒サマニゼ
ラト落ツ。

判官ハ手負ヒタル次信ヲ陣ノ後ロヘ昇キ出サセ
テ、馬ヨリ下リ次信カ手ヲ取リテ、「如何ニ如何ニ。」ト宣
ヒケレバ、「今ハ斯ウ候フ。」ト申ス。「此ノ世ニ思ヒ置ク
コトアラバ義經ニ云ヒ置ケ。」ト宣ヒケレバ、息ノ下ニ
テ申シケルハ「ナドカ思ヒ置クコトノ無ウテハ候フ
ベキ、先奥州ニ留メ置キ候ヒシ老母ヲ今一度見候ハ
ヌコト、サテハ君ノ御世ニ渡ラセ給ハンヲ見參ラセ
ズシテ先ダチ奉リ候フコトコソ、冥路ノ障トモナリ

ヌベク候ヘ。」ト、是ヲ最期ノ言葉ニテ、年二十八ト申シ
ヽ、二月十八日ノ酉ノ刻ニ、遂ニ八島ノ磯ニテ果テニ
ケリ。

平家物語。

第三課　世界一周　第五

りばあぷーるハ世界第一ノ港ト稱セラレ閑キシニ
違ハズ、巨大ナル波止場海岸ニ相並ヒ、船舶ノ出入引
キモ斷ラズ、實ニ世界第一ノ貿易場ト見受ケラレタ
リ。一夜ヲ船ニ明カシテ朝マダキニ上陸シ、直ニ汽
車ニ乘リ込ミテろんどんニ向ヒヌ。

途上見ル所ノ景色ハ、曾テ亞米利加ニ於テ見シトハ異ナル所少カラズ。市邑ノ家屋ハ、多クハ古ク黒ズミテ、高サモ三四階ニ止リ、七八階ノ建物ハ少シ。街路ハ幅狹ク、人ハ多ク弊衣ヲ着タリ。蓋シ米國ハ國新シクシテ、家屋ノ建築道路ノ敷設、皆近來ノ技術ニ成リ、且人口少キガ故ニ貧人少シ。之ニ反シテ英國ハ國古クシテ、家屋道路ハ數十年乃至數百年ノ古體ヲ存スル者多ク、又人口多キガ故ニ貧民多シ。

然レドモ野外ノ景色ヲ見ルニ、丘陵平地ハ盡ク牧場又ハ田圃トナシ、牛羊ヲ飼ヒ、麥蔬ヲ作レリ。又田野ノ間ニハ清潔ナル村落此處彼處ニ散在セリ。經ベテ野外ノ景色ノ人工ヲ加ヘテ殘ス所ナキ様ハ、全國恰モ一大園庭ノ如シ。英人ハ我ガ日本ノ田圃耕耘ノ行キ屆キタルヲ稱シテ「一國擧ゲテ花園ナリ。」ト云ヒシガ、余モ亦英國ノ野景ヲ稱シテ園庭ト云ハン。蓋シ我ガ國ト英國ヲ除キテハ、他ニ斯ク計リ人工ヲ田野ニ盡クシタル所アルコトナシ。

田野ノ景色斯クノ如クナルニ、路都邑ヲ過グルトキ遥カニ之ヲ望メバ、寺院ノ高塔ノ雲際ニ聳ユルアリ、卓森林ノ邊ニ至ルトキ近ク之ヲ覘ヘバ、古城跡ノ

樹間ニ立テルアリ。國古クシテ名所舊蹟ニ富ミタルヲ知ル。

りばあぷうるヨリハ時間許ニシテろんどんニ着キヌ。ろんどんハ名ニ負フ英國ノ首府ナレバ、市中觀ルベキ者多シ。余ハ先其ノ有名ナル國會議事堂ヲ觀ントテ、馬車ヲ驅リテ行ク。途ちぷあるがるすくるぜニ至ル。其ノ中央ニ高サ十四丈ノ石柱ヲ立テ、其ノ頂ニ故海軍大將ねるそんノ肖像ヲ安置セリ。ねるそんハ屢、ふらんす皇帝なぽれおんノ海軍ヲ破リ、終ニすぺいんノ南ナルとらふあるがるノ戰ニ討死シタレドモ、なぽれおんの遂ニ英國ヲ攻メサリシハ、將軍ノ力ニ由ルコト多ケレバ、英人ハ今ニ將軍ノ大功ヲ稱シテ止マズ。此ノ所ハ全ク將軍ノ功ヲ表スル爲メニ設ケタル者ニシテ、將軍戰死ノ地名ヲ取リテとらふあるがるすくるぜト名ケタリ。

此ノ所四方大厦軒ヲ並ベ、往來絡繹タリ。北ニハ國立美術館アリ、内ニ古今ノ名畫ヲ陳列セリ。東ニハ宏大ナル旅店多シ。蓋此ノ地ハいうろーつぱ大陸ニ連續セル鐵道ノ極端ナルちゃりんくろす停車場ニ接スレバナリ。

ねるそんノ省像ハ南ニ面セリ、其ノ正面ニ一街アリ、ほわいそほーれる街ト云フ。此ノ街ノ兩側ニ官省多シ。行クコト數町ニシテ終ニ國會議事堂ニ至ル。議事堂ハ宏大ナル建物ニシテてーにむす河ヲ後ニセリ。其ノ内外美ヲ盡クセルコトハわしんそんノ議事堂ニ勝レタリト雖、地低キガ故ニ遠ク望ムベカラズ、且ろんどん市中烟霧多キガ故ニ、外面汚損シテ光ナシ。

議事堂ニ對シテゑすとみんすとる寺院アリ。是ハ英國ノ國寺ニシテ、國王ノ祝祭ヲ行フ所ナリ。堂宇ノ莊嚴、筆舌ノ及ブ所ニ非ズ。堂内古來ノ國王、王族、國家ニ大勲アリシ政事家及ビ著名ナル學士文人ノ肖像ヲ安置ス。英人ハ死シテ此ニ祭ラルヽヲ以テ無上ノ榮譽トス。此ヨリ西ニせんとじーにむすト稱フル公園アリ、此ノ邊皇族及ビ貴族ノ住家多シ。園ノ西ニ王宮アリ、ばつきんがむ宮ト云フ。國王ろんどんニ來ルトキ驛ヲ此ニ駐ム。外見甚ダ美ナラズト雖、宏大ナル建物ナリ。

余又一日乘合馬車ニ乘リテろんどんノ古城ヲ觀ニ行キケリ。ろんどん其ノ他歐米ノ都邑ニハ、通常

ノ馬車ノ多キコト我ガ國ノ人力車ニ均シ。其ノ外ニ鐵道馬車アリ又乘合馬車アリ。乘合馬車トハ云ヘド、我ガ國ノ乘合馬車ノ如キ穢キ者ハ絶エテナシ。而シテろんどんノ乘合馬車モ鐵道馬車モ皆二階アリ、即チ屋根ニ椅子ヲ並ベ、其ノ周邊ニ欄ヲ設ケタルナリ。故ニ是等ノ馬車ハ甚ダ丈高ク見ユ。婦人ハ大抵下ニ乘リ、屋根ニ上ル者ハ皆男子ナリ。余等ノ如キ市中見物ヲ目的トスル旅人ニハ乘合馬車ノ屋根程都合好キ乘物ハナシ。殊ニ馭者ノ傍ニ坐ヲ占メテ、アレハ如何ナル建物ゾ、是ハ誰ガ家ゾト問ヒ尋ネツヽ行ケバ、案内者ヲ雇フヨリモ便利多シ。

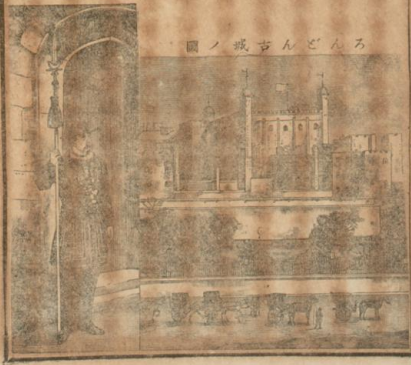
繁華ナルれーつくすふーれるどー街ヲ東ニ行ケバ、中央郵便局ノ前ニ至ル。其ノ南街路ノ後ニせんとぽうる寺院アリ、是レろんどん第一ノ高キ建物ナリト云フ。此ノ所ヨリ東ノ街路ハ、往來尤モ雜沓ヲ極メ、其ノ東端ニ至レバ、ろんどん府知事ノ官邸、英國銀行、商業取引所等宏大ナル建物相集レリ。英國銀行ハ建物華美ナラズ、又高大ナラザレドモ、外部頗堅固ニ見ユ。此ノ銀行ノ事業ノ盛大ナルコトハ、恐ラクハ世界第一ナルベシ。商業取引所ハ前面甚ダ壯麗ナル

建物ナリ。諸商毎日此ニ會シテ商品ノ取引ヲ相談ス。

府知事ノ官邸ノ横通ヲろんばあど街ト云フ。此ノ邊銀行多シ。此ノ街ヲ東ニ一町程行キテ右折シ、稍行ケハ路傍ニ高塔立テリ。今ヨリ二百餘年前ニ六日間燒ケ續キタリト云ヒ傳フル未曾有ノ大火アリキ。此ノ塔ハ即チ其ノ記念ノ爲メニ建テタル者ナリ。此ノ塔ヲ過ギテ稍行ケバ、名高キろんどん橋ニ至ル。橋ハてーえむす河ニ架ケタル者ニテ甚ダ長ク、建築モ亦好シ。橋上人車ノ往來絡繹トシテ、荷物ノ運搬頻繁タリ。

橋ヨリ前ノ高塔マデ立チ戻リ、右折シテ二町程行ケバ、ろんどん古城ニ至ル。此ノ城ハ甚ダ古キ者ナリ。初ハ王宮タリ城塞タリシト雖歴史上ニハ牢獄トシテ尤モヨク知ラレタリ。今ハ武庫トナシ、古代ノ武器ヲ陳列シテ衆庶ノ縱覽ヲ許シ、又國王ノ御物冠、杖ノ類ヲモ陳列セリ。又獄室ノ縱覽ヲモ許ス、其ノ室ニ入リシ人々ノ中ニハ或ハ惡逆無道ニシテ罪ヲ犯シタルモアリ、或ハ忠誠ナルモ讒ニ遇ヒテ寃ニ死シ、史上ニ名ヲ留メタル者モ多シ。室内ノ四壁ニ

囚人ノ書キ殘セル書蹟アリ、或ハ簡短ナル文句、或ハ姓名ノミヲ印シタルナレドモ、以テ當時此ノ室ニ閉ヂ籠メラレテ愁苦悲歎セシ樣ヲ思ヒ遣ルニ足ル。城門及ビ城内諸所ヲ守ル者ハ、皆異形ノ服ヲ着クリ。蓋



ろんどんの古城ノ圖

シ英國古制ノ軍衣ナラン、右ノ圖ニ就キテ見ルベシ。此ノ城てえむす河畔ニ在リ、此ノ所ヨリてえむす河底ヲ通シテ隧道アリ、歩行シテ南岸ニ到ルベシ。

第四課　世界一周　第六

余又一日けんしんとん博物館ニ行キケリ、ろんどん古城ハ府ノ東部ニ在リ、けんしんとん博物館ハ其ノ西部ニ在リ。而シテ西部ニハ廣大ナル公園多シ。りぜんと公園ニハ動物園植物園アリ、動物園ニハ寒帯熱帯諸國ノ異獸珍禽ヲ集メ、植物園ニハ奇木

異草ヲ集メタリ。此ノ公園ノ西南ニ又大公園アリ、はいでぱあくト云フ。此ノ公園ノ南邊ニ沿ヒテ行クコト十餘町ニシテ、けんしんでんニ至ル。此ニ博物館多シ、美術品博物館、生物博物館、印度博物館、理科博物館等ナリ。蓋此ノ地元萬國大博覧會ノ在リシ所ナレバ、印度博物館、理科博物館等ハ其ノ建物ヲ假リ用ヒタルナリ。故ニ是等ノ建物ハ甚ダ醜シ。之ニ引キ換ヘ、生物博物館ハ新築ニシテ壯麗ヲ極ム。

是等ノ博物館ノ後、即チはいでぱあくノ南邊ニあるべるで公ノ記念碑アリ。是ハ今ノ英國女王びくとりやガ、其ノ夫タリシあるべるで公ノ爲メニ建テタル者ナリ。女王ハ今ヨリ五十餘年前ニ王位ニ即キ、後あるべるで公ヲ迎ヘテ夫ト爲シヽモ、王位ハ自ラ占メ居タリ、公薨シテ後猶王位ヲ保ツコト故ノ如シ。

余ハろんでんニ逗留スルコト殆三週間ニシテ、其ノ間ニ屢市外ノ諸名所ニ遊ヒキ。ろんでんノ南數里ニ水晶宮ト云フ所アリ、半ハ博物館ニシテ半ハ遊戯場ナリ。又ろんでんノ西ニきうノ花園ト云フ廣キ植物園アリ。又其ノ西八里餘ニゐんぞる城トテ

女王ノ平常住マハルヽ宮殿アリ、城内拜觀ヲ許サル。ろんどんノ北二十里許ニけんぶりつぢト云フ所アリ、爰ニ天下ニ名高キ大學校アリ。余ハ是等ノ所々ヲ回覽シ畢リテ、ふらんすノぱりニ向ヒ出立セリ。

らぷりんくろすノ停車場ニテ汽車ニ乘リ、てえむす河ヲ渡リ、南ろんどんヲ過ギ、司天臺ニテ名高キぐりにつち寺院ニテ名高キかんたあべりヲ通リテ、遂ニ南海岸ナルだばあ府ニ達ス。車ハ直チニ海ニ築キ出シタル波止場ニ至リテ渡船ニ接續ス。故ニ車ヲ下リテ直ニ船ニ移リ、十里ノ海峽ヲ渡ル。だばあ近傍ノ海岸ハ、白堊崖ヲ爲シ、海ヨリ遠ク之ヲ望メバ、沿海白壁ヲ回ラセルガ如シ。二時計ニシテ、海峽ヲ渡リテふらんすノかれいニ着キ、直チニ復汽車ニ乘リテ發ス。

英國ヨリ佛國ニ渡レバ、風土ノ差世態ノ異アルヲ覺ユ。佛國ノ汽車ハ英國ノニ比スレバ醜ク、佛國ノ市邑ハ英國ノニ比スレバ貧シク、佛國ノ野景ハ英國ノニ比スレバ荒レタリ。

午前十時ろんどんヲ發スレバ、其ノ夜八時頃ぱりニ着ス。ぱりハ世界第一ノ華麗ナル都府ナリ。其

ノ最モ賑シキ街ハいたりやん大路、かぶしん大路等ニシテ、酒樓茶店軒ヲ並べ、馬車道ノ兩側ニ樹木ヲ植エ、家々ノ建築皆一樣ニセリ。我ガ東京ナル銀座通ハ此ノ街ニ倣ヒテ造リシモノナルベケレド、及バザルコト遠シ。かぶしん街ヲ西ニ行キ左折スレバ、ぶらあすぞらこんこるぞニ至ル、此ハ廣キ平地ニシテ噴泉アリ高塔アリ、景色甚ダ壯快ナリ。此ノ所ヨリ西ニ續キテ名高キしゃんぜりぜアリ。しゃんぜりぜハ公園ノ如ク多ク樹木ヲ植エタル中央ニ、馬車道アリテ、貴族富豪馬車ヲ驅リテ遊ブ所ナリ。しゃんぜりぜノ西端ニ凱旋門アリ、是ヨリ南數町ニシテぞろかでろ宮アリ。殿上ヨリ遥カニ見渡セバ、ぱり府大半眸中ニ在リ。宮ノ前ニ流ルヽ河ヲせえ、ん河ト云フ。河ノ彼ナタニハ諸官省、國會議事堂アリ、何レモ大厦ナリ。河ノ兩岸ハ石垣ヲ築キ、架スルニ鐵橋石橋ヲ以テス。

ぶらあすぞらこんこるぞノ東ハついれり園ナリ。園ニ續キテついれり王宮アリ、其ノ西ニるうふる宮アリ、何レモ宏大ナル建物ナリ。今ハ王宮ノ一部分ヲ官省トナシ、又一部分ヲ博物館トナセリ。館内畫

幅古物多シ。ふらんすハ昔王國ナリシモ、今ハ共和國トナリ、人民中ヨリ人才ヲ選ビテ大統領トナスコト亞米利加合衆國ノ如シ。余ばりニ留マルコト二週間計、見物セシ所甚ダ多シト雖、今ハ一々語ルコト能ハズ。

余ばりヲ去リ汽車ニテまるせいゆニ向ヒ、途中りゐん府ニ止リシガ、此ノ都府ハ佛國第二ノ都會ナルベシ。地ろーゐん河ノ畔ニ位シ、羅布ノ産出多キヲ以テ名アリ。是ヨリろーゐん河ニ沿ヒテ南シ、まるせいゆ港ニ着ス、まるせいゆハ地中海ニ臨メル港ニシテ、地中海濱ノ諸國及ヒ東洋トノ交通繁ク、船舶ノ輻湊スルコト極メテ多シ。

第五課　なぽれおんぼなぱると

ふらんす人ハ心輕々シクシテ、新奇ヲ好ムコト甚シ。あめりかノ獨立セシヤ、世界無類ノ共和政府ヲ建テ、後日ハイザ知ラズ、今ハ幸福無上ノ國タリシカバ、諸國ノ人民皆珍シキ事ト羨ミシモ道理ナリ。況ふらんす人ノ氣質ニ於テヲヤ、況ふらんす人ハ先王るゐ十四世ノ驕慢及ヒるゐ十五世ノ暴虐ニ因リ、王

室ヲ厭フコト日久シキニ於テヲヤ。曾是ノミナラズ、ふらんす人ハあめりか人ノ服ヲ排シテ親シク其ノ獨立ヲ助ケシカバ、勇烈ヲ慕ヒ幸福ヲ羨ムノ念モ自ラ深カリケリ。

サレバふらんすノ都城ばりニハ、無數ノ一揆起リテ、貴族顯官ノ首街上ニ累々タリ。遂ニハ國中ノ男女老幼ヲ問ハズ、皆モ一揆ノ徽章アル赤帽ヲ戴カザル者ハ、鮮血ノ紅ヲ被ラザルヲ得ザルニ至レリ。憐ムベシ寛仁柔弱ナルる十六世ハ、先代ノ暴虐其ノ身ニ報イ、一千七百九十三年、玉座ヲ下リテ斬首臺ノ上ニ上リヌ。斯クテ一揆ノ首領等ハ輙クふらんすヲ支配セシガ、共和政治モ名ノミニテ、其ノ暴虐ハ王室ノ暴虐ヨリモ甚シカリキ。「憂シト見シ世ゾ今ハ戀ヒシキ。」是レ人情ノ常ナリ、況ふらんす人ノ倦ミ易キニ、加フルニ當政府ノ暴ヲ以テセシカバ、國中怨チ又共和ヲ厭フニ至レリ。此ノ亂ハ歴史ニ名高キふらんすノ革命ナリ。

革命ノ變隣國ニ聞ユルヤ、各國ノ帝王等其ノ人民ノ之ニ倣ハンコトヲ恐レ、相共ニふらんすノ王政黨ヲ助ケテ共和政府ヲ倒サントセリ。今ヤふらんす

ハ、内ニ黨派ノ軋轢アリ、外ニ敵國ノ聯合アリ、内憂外患交至リ、復奈何トモスベカラズ。此ノ時ニ方リ天一人ノ英雄ヲ生シ、黠濫タル妖雲ヲ拔キテ赫々タル天日ヲ望マシメ、獨ふらんすノミナラズ、えうろつぱ全洲ヲシテ文明ノ光ヲ反射セシムルニ至レリ。其ノ人ヲ詐トカスル、當時砲兵士官タリシなぽれおんぼなぱるとト云フ少年是ナリ。

なぽれおん共和政府ノ命ヲ奉シテ、王黨ノ根據ナルつうろん府ヲ攻メ落シヽヲ手始トシテ、向フ所前無ク、僅ニ數年ノ間ニシテ其ノ名天下ニ轟ケリ。亦

タ三十ナラズシテ、いたりやヲ征服シえじぷとニ克チ、其ノ功ヲ以テ軍務總督ニ任セラレタリ。ふらんすハ既ニ共和政府ノ混雜ニ厭キ、方ニ智勇膽略アル頭領ノ定ランコトヲ願ヘリ。而シテなぽれおんハ其ノ人ナリ。遂ニ微身ノ執政ニ選擧セラレシガ、纔バクモナクふらんす皇帝ノ位ニ陞リキ、實ニ一千八百四年なぽれおん三十五歳ノ時ナリ。

斯カリシカバえうろつぱ各國ノ帝王皆なぽれおんヲ憎ミ妬ミテ、相共ニ兵ヲ交フルニ至レリ。然レドモなぽれおんガ鋒ハ、鐵壁モ防グベカラズ。なぽ

れねんガ旗ノ向フ所、將卒奔リ帝王拜ス。其ノ戰勝ヲ語ラント欲スルモ、却リテ頻ハシキヲ憚ルナリ。サレバ余ハ唯此ノ人ノ言行、一二ヲ記シテ以テ其ノ沈勇剛膽ノ一斑ヲ示サントス。

なぽれねんガいたりやヲ攻メシトキ、敵軍ろしノ橋ヲ前ニシテ陣ヲ取リ、大砲三十門ヲ列シタリ。なぽれねんハ毫モ振顧セズ、士卒ヲ麾キテ河ヲ渡ラントセシニ、待チ構ヘタル敵軍ヨリ大砲ヲ連發セシカバ、何カハタマルベキ、佛軍七百餘人枕ヲ並ベテ彎タレヌ。天下無雙ノ精兵モ是ニ辟易シテ、アハヤ敗軍ト見エタルニ、なぽれねんハ奮然トシテ馬ヨリ下リ、躬ヅカラ國旗ヲ執リ、一寸モ引クマジト下知シケレバ、總軍是ニ勵マサレ、遂ニ橋ヲ渡リテ敵ヲ破リ、破竹ノ勢ニテいたりやヲ平ゲヌ。所謂落日橋ノ戰是ナリ。

なぽれねんハ士卒ト甘苦ヲ共ニシ、之ヲ恤ムコト

子弟ノ如クナリケレバ、士卒ノ之ニ服スルコト父兄ノ如クナリキ。いたりゃ征伐ノ時、あるこらノ戰頗難儀ナリシカバ、なぽれれんハ例ノ如ク士卒ニ先立チテ進ミケルガ、亂軍ニ隔テラレシ折シモ、過チテ足ヲ泥中ニ踏ミ込ミ、既ニ危カリケルニ、兵士等之ヲ見テ、聲々ニ「將軍ヲ救ヘ。」ト呼バハリ、無二無三ニ蒐ケ入リタル勇氣、大將ノ命令ニ百倍シ、此ノ勢ヲ以テ遂ニあるこらヲ攻メ落シヌ。

なぽれれんガ再度いたりゃヲ伐チケルトキ、潛ニあるぷす山ヲ踰エテ敵ノ不意ニ出デントセリ。あるぷすハ世界一二ノ高山ニテ、千年ノ積雪消ユル時ナク、古來人跡絶エタル處ナレバ、人皆之ヲ憚リケルニ、なぽれれんハ「豈余ヲ妨グルあるぷすアランヤ。」トテ夜ヲ冒シテ此ノ嶺ヲ踰エタリ。なぽれれん常ニ曰ヘラク、「能ハズト云フ字ハ唯愚人ノ字書ニ在リ。」ト。

サレバなぽれれんノ向フ所ハ、猶草木ノ勁風ニ靡クガ如ク、各國ノ王公ヲ屢シテ已レガ親族功臣ヲ封ズルコト、恰モ將棋ノ駒ヲ弄スルガ如ク、既ニ歐洲大陸ノ盟主トナリ、終ニハ五大洲ヲ一統スルノ勢アリ。歴史家此ノ人ヲ評シテ曰ク、「ぐりいすノあれきさん

そるヲ始メ、古來英傑ノ君主少カラス。然レドモ上ハ父祖ノ威ヲ假ラズ、下ハ宿將ノ助無ク、眞ニ一人ノ智勇ヲ以テ烏合ノ兵卒ヲ訓練シ、壯年ニシテ大名ヲ成セル者ハ唯此ノ人一人アルノミ」ト。後人詩アリ曰ク、

「半生威武遍西洋、
一自功名歸大帝、　青史長留赫赫光、
無人能說歷山王」

歷山王ハ即チあれきさんそるナリ。

歐洲大陸ハ萬事なぽれおんガ心ノ儘ナリシカド、英國ハ海峽ノ要害ト海軍ノ強大ヲ恃ミテ、其ノ命ニ

從ハザリケレバ、なぽれおんハ大陸諸國ニ令シテ之ト交易スルヲ禁ジタリ。然レドモ此ノ令實際不便ナリケレバ何レモ潛ニ英國ト交易セリ。是ニ於テなぽれおんハ先ろしやノ罪ヲ糺シテ各國ヲ嚇サント欲シ、軍ヲ起シテろしやニ向ヒキ。是レなぽれおんガ運命ノ末ニシテ所謂「英雄ノ末路」ニゾアリケル。ろしやハなぽれおんノ鋭鋒ニ抵抗セズ、國都もすこうヲ燒キ拂ヒテ北方ニ退ケリ。是レ即チ「清野」ノ策ニテ、佛ノ大軍ハ是ガ爲メ寒天ニ野宿セザルヲ得ザルニ至レリ。ろしやハ聞ユル寒國ナル「ニ」折節

此ノ年ハ寒氣ノ到ルコト平年ヨリモ早カリシカバ、流石ノなぽれおんモ目算盡ク齟齬シテ怒ニ軍ヲ退ケタリ。此ノ退軍ノ道スガラ、佛軍ハ此處彼處ニテ魯軍ニ追擊セラレ、加フルニ曾テ經驗セサル嚴寒ニ攻メラレ、指ヲ墮シ肌ヲ裂キ、屍ハ野ヲ蔽ヒ、血ハ雪ヲ染メ盡クセリ。六十四万ノ大軍生キテ反ル者僅ニ四萬人、其ノ中兵器ヲ執リ得ル者千人ニハ過ギサリキ、無慙ト云フモ疎カナリ。

なぽれおんハ例ノ屬セヌ氣質ナレバ、更ニ軍兵ヲ募集シテ再擧ヲ謀リケルガ、諸敵國ハ其ノ機會ヲ見テ更ニ聯合シ、魯軍ト共ニ、ふらんすニ攻メ入リタリ。時ナルカナ、佛人ノ慓悍モ一時ニ挫ケ、ばりハ陷リ、なぽれおんハ位ヲ下リ、地中海ノ「えるば」島ニ移サレヌ。斯クテふらんすハ再び王黨ノ政府ヲ戴ケリ。

なぽれおんハえるば島ニ居ルコト殆一年ヲ經テ、潛ニふらんすニ歸リキ。なぽれおんガ上陸セシトキハ唯身一ツナリシガ、年來訓練シ置キタル將卒等爭ヒテ馳セ集リ、人民ハなぽれおん朝廷ノ時國威ノ赫々タリシヲ思ヒ起シ、「皇帝萬歳」ノ聲忽チ國中ニ廣ガリ、吾モ々々ト皇帝ノ軍ヲ迎ヘケレバ、僅ニ廿日ニ

シテばりヲ乘リ取リ、再ヒ即位ノ式ヲ行ヒケリ。是ニ於テ各國又聯合シテ軍ヲふらんすニ出シキ、其ノ司令長官ハ英國ノ名將ゑりんとん侯ナリキ。なぽれおん國中ノ兵ヲ盡クシテ迎ヘ戰ヒシカ、終ニわとるろうノ一戰ニ打チ負ケテ、せんとへれな島ニ流サレヌ。一千八百二十一年、なぽれおん此ノ島ニ死シヌ、享年五十有二。後二十年、國人なぽれおんノ功業ヲ念ヒ、之ヲふらんすニ改葬セリ。詩アリ曰ク、

「難將蓋世英雄骨、埋得彈丸孤島中。」

なぽれおんハ唯軍略ニ長シタルノミナラズ、諸ノ學藝ニ通ジ、之ヲ勸メ勵マスノ方宜シキヲ得タリキ。サレバふらんすノ學問、工業、法律等ハ、此ノ時ニ非常ノ進歩ヲナセリ。然ノミナラズ此ノ時各國ノ交通微ニ繁クナリシカバ、道路、橋梁等ノ工事大イニ進ミ、軍事ノ考究益精シクナリ、今日ねうろつぱノ文明ヲ成シタルハ、此ノ人ノ衝動ノ功多キニ居ルト云フ。

第六課　世界一周　第七

まるせいゆニテ佛國郵船會社ノ船ニ乘リ込ミ、是ヨリ歸路ニ就ケリ。佛國南海岸ノ山々ハ、岩石多ク

シテ樹木少シ。　地中海ハ浪荒シト魚チテ聞キ居タルガ、まるせいゆヲ出デテヨリ一晝夜ノ程ハ、船ノ動揺スルコト甚シカリキ。　二晝夜計ニシテ行クテノ方ニ噴火山ヲ望メリ、近ヅキテ見レバ是ナンすとろんぼりノ火山ナリケル。　是ニ並ヒテりぱり諸島ノ火山モ見エ、遙カニいたりやししりノ陸モ見エタリ。陸ニ見エシ大火山ハししりノゑそな山ナリ。　船ハ次第ニ陸ニ近ヅキテ、遂ニいたりやトしし島ノ間ナルめつしなノ海峡ヲ通リヌ。　此ノ海峡ハ幅狹ク、兩岸ノ都邑ヲ見渡シテ風景甚タ佳シ、　船此ノ海峡

ヲ過ギテ後ハ、又陸ヲ見ザルコト三晝夜計ニシテ、ゑじぷとノあれきさんどりやノ港ニ着キヌ。

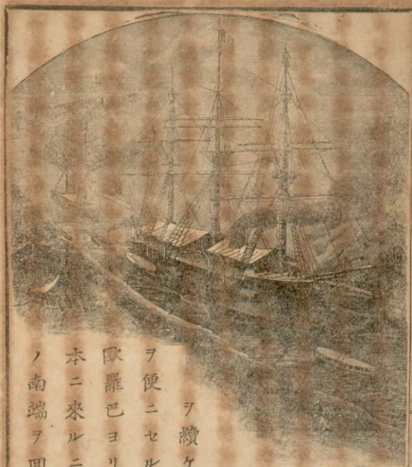
此ノ港ハ亞非利加ノ北海ニアリテ、ないるノ河口ノ極西ニ位ス。氣候温暖ニシテ、頃ハ十二月ノ半ナリシモ、我ガ國春夏ノ間ノ氣候ナリキ。商業盛ニシテ船舶輻湊シ、地中海東部ニ在リテハ第一ノ港ナラン。　昔まけどにや王あれきさんどる遠征シテ此ノ地ニ至リ、始メテ此ノ港ヲ開ケリト云フ。

土人ハ歐洲人ニ似タレドモ、色黑クシテ肉瘠セタリ。　風俗大イニ趣ヲ異ニシ、衣ハ長クシテ法衣ノ如

ク、頭ニハ布ヲ纏ヒ付ケ又ハ赤キそるこ帽ヲ被リ、而シテ足ハ跣足ナリ。女ハ覆面シテ目ヲ出スノミ、家ハ石造ナレドモ矮小ニシテ汚穢ナリ、市街ハ淡ケレドモ石ヲ敷キタリ。歐洲人多ク此ニ來リ住ムガ故ニ、歐洲風ノ家屋モ寡カラズ。

郊外ニ出ツレバ沙丘斷續シ、鄰寸所々ニ叢ヲナシ、駱駝、牛等ヲ牽キテ行ク者アリ、是レ眞ニ亞非利加ノ景色ナリ。抑、えじぷとハ世界第一ノ古國ニシテ、數千年以前ノ古物多ク存ス。あれきさんどりやヨリ内地ニ入ルコト凡五十里ニシテかいろ府アリ、是レえじぷとノ首府ナリ。此ノ都府ニ近ク有名ナル大丘塔三基アリ、何レモ數千年以前ノ國王ノ墳墓ナリ。此ノ外ニ石造ノ遺物猶多シ。余ハあれきさんどりやヨリ港ニ上陸セシノミニテ直ニ郷ニ歸リケレバ、是等ノ遺物ヲ見ルコト能ハザリキ。

あれきさんどりやヲ出デテ東ニ進ミ、一晝夜計ニシテぽるとさいどニ達セリ。此ハすゑず運河ノ北端ニシテ、此ノ港ハ運河開ケテ後新ニ立チタル者ナレバ、今猶小市街ニ過ギズト雖、年ヲ逐ヒテ必繁盛ニ赴クナルベシ。



す忍ず運河ハすゑず ノ地峡ヲ切リ開キ、地中海ト紅海トヲ續ケテ船ノ往來ヲ便ニセル者ナリ。昔歐羅巴ヨリ印度、支那、日本ニ來ルニハ、豈非利加ノ南端ヲ回航シケレバ、

二三個月ヲ費サヂハ一航海ヲナシ難カリシモ、此ノ運河開ケテヨリハ、一個月以内ニシテ印度ニ達シ、一個月半ニテ日本ニ達スルコトヲ得ルニ至レリ。此ノ運河ノ開通ヲ企テシ人ハ佛蘭西ノれつせつぷト云フ人ナリ。今ヨリ二十餘年以前ニ竣工シ、爾來船舶ノ往來スル者年々増加セリ。運河ハ長サ四十里許ニシテ、幅五十間許ナリ。故ニ大船ハ二艘並ビ行クベカラズ。然レドモ運河ハ數多ノ湖水ヲ通ジ、又所々ニ船舶ノ待合所ヲ造リタレバ、船ノ行キ合ヒテ衝突スル憂ハナキナリ。

一晝夜ニシテ運河ヲ過ギ、其ノ南端ナルすゑず港ニ立チ寄リ、又發シテ紅海ニ渉ベリ。すゑず運河及ヒ紅海ハ暑氣烈シキ所ナリト聞キツレド、今ハ冬ノ最中ナリケレバ、幸ニサマデニ非ズ、寒暖計ハ八十度ヲ超エザリキ。

紅海ノ東岸ハあらびゃ國ニシテ、西岸ハ亞非利加洲ナリ。東岸ニしない山其ノ他ノ山々雲烟ノ間ニ隱見ス。山皆赭色ヲ帶ヒテ草木ナシ。三晝夜ニシテあらびゃノ南端ヲ回リ、あでん港ニ着キヌ。

あでんハあらびゃノ西南ノ海岸ニ在ル港ニシテ、東西ニ往來スル船舶ノ石炭供給所タリ。港ハ窄元タル岩丘ニ沿ヒテ開キ、居人ハ内地ノ者ト通商ヲ行フ、荷物ハ多ク駱駝ヲ以テ運搬ス。土人ハあらびゃ人ニシテ色黑ク、多クハ裸體ナルカ、或ハ白布ノ單衣ヲ纏フノミ、誠ニ野蠻ノ風俗ナリ。

あでんヲ出デテ、再ヒ海上ニ乘リ出セバあらびゃ海ナリ。六日ニシテせいろん島ノころんぼ港ニ着キヌ。せいろんハ印度ノ南ニ在ル大島ニシテ、今ハ英國ノ領トナリ、ころんぼハ即チ其ノ主府ナリ。土人ノ家屋ハ矮小ニシテ、其ノ建築法ハ我ガ國ノ家屋

ニ似タル所アレドモ、汚穢ナルコト甚シ。余ハ此ノ地ニテ始メテ我ガ國ニ近ヅキシコトヲ覺エシハ、曾ニ家屋ノ相似タルノミナラズ、又佛教ノ盛ニ行ハレテ佛寺ノアルガ故ナリ。此ノ地ハ熱國ニシテ且地味豊饒ナリト見エ、椰子ノ外珍異ナル樹木暢茂シ、さんふらんしすこニ上陸セシ以來未ダ曾テ見サル景色ナリキ。

てろんぼヲ出デテ印度洋ヲ航スルコト五晝夜ニシテ、行クテニ草木青々タル島嶼ヲ望ミヌ。アレハ何處ト問ヘバ、すまとら島ノ北ナル島嶼ナリト云フ。

漸ク近ヅクニ隨ヒすまとら島モ次第ニ見エヌ。舩ハ小島ノ間ヲ過キ行キケレバ、望遠鏡ヲ以テ望ミ見ルニ、椰子其ノ他ノ樹木一面ニ生ヒ茂レリ。此ヨリハすまとら島ト亞細亞ノまれい半島ノ間ナルまらつか海峽ナリ。すまとらニハ雲際ニ聳エル高山多シ。まらつか海峽ニ入リテヨリ一晝夜計ニシテ、しんがぽうるノ港ニ着キヌ。

第七課　霖雨ト暴風

諸子ハ理科ニ於テ風雨ノ起ル理ヲ學ヒシカ。空

氣ノ一所熱セラルヽトキハ、膨脹シテ輕クナルガ爲メニ浮動シテ流通ヲ起ス、是ヲ風ト云フ。又熱セラレタル空氣ハ、多クノ水蒸氣ヲ含ムコトヲ得レドモ、寒冷ニ遊ヒテ冷サルヽトキハ、其ノ水蒸氣ヲ含ミ得ズシテ、元ノ水ニ還ス、是ヲ雨ト云フ。

印度洋ニハ定時風トテ、毎年十月ヨリ翌年三月マデハ常ニ東北風吹キ、四月ヨリ九月ノ間ハ西南風ノミ吹ケリ。其ノ西南風ハあふりか、及ヒあらびやノ沙漠ヨリ來ル極熱ノ空氣ニシテ、且大洋ヲ經テ來ルヲ以テ多量ノ水蒸氣ヲ含メリ。故ニ此ノ風ノ過グル所多クハ雨ヲ降ラス。其ノ餘波我ガ國ニ及ヒテ毎年六月ヨリ七月上旬ニ至ルマデ、凡一個月ノ霖雨アリ。是ノ時恰梅子ノ黄バム頃ナレバ、之ヲ梅雨ト云ヒ、又ハ器具食物ニ黴ヲ生ズル時ナレバ、之ヲ黴雨トモ書ケリ。

印度洋ニテ東北風ノ西北風ニ變シ、又ハ、西北風ノ東北風ニ替ルトキハ、雨風相激シテ暴風ヲ起ス。我ガ國ニテ三月及ヒ九月ヲ「あれ月」ト稱シ、猶客農夫ノ最モ注意スルハ即チ此ノ風ノ餘波ナリ。農夫ノ最モ畏ルヽ二百十日ハ毎年九月初ニシテ、此ノ「あれ月」

ノ中ニテ殊ニ畏ルベキ時ナリ。

第八課　世界一周第八

しんがぽうるニ近キ處島嶼多シ、水面穩カニシテ樹木ノ水中ニ生ヒタル者アリ。しんがぽうるモ島ニ在リテ、まれい半島ト一葉水ヲ隔テタリ。しんがぽうるハ常ニ暑氣甚シク、此ノ時ハ冬ナリシモ猶ハ十三度ノ熱サナリキ。土人ハまれい人種ニシテ、白布ノ筒袖襦袢ニ腰卷ノ如キ物ヲ着ケタリ。膚褐色ニシテ容貌我ガ國人ニ似タル所アリ。市中又支那

人多クシテ、或ハ商業ニ從事シ、或ハ賤業ニ使役セラル。支那人ハ亞米利加ニモ渡リ、あうすとらりやニモ渡リテ力役スル者多シ、其ノ未ダ多ク至ラザル所ハ唯歐羅巴ノミナリ。

しんがぽうるハ現今英國ノ領分トナリ、亞細亞南方ノ要港タリ。此ヲ出デ東北ニ向ヒテ進ミ行クニ、南ニ方リテ數多ノ島嶼見エタリ。漸クしんがぽうるノ近海ヲ離レテ支那海ニ出ヅレバ、波荒ク舩搖ラレテ大イニ苦シミキ。しんがぽうるヨリ四晝夜ニシテかんぼぢやノ海岸ニ着キ、めこん河ノ枝流ヲ溯

リテさいごん府ニ至リキ。此ノ地ハ現今ふらんすノ領分ニシテ、安南、東京等ヲモ併セ領ス。

此ノ地ニモ支那人ノ商業ニ從事スル者多シ。土人ハ支那人ト同種ナルベシト雖、丈低ク肉瘦セ性質懶惰ナリ。

さいごんヲ發シ河ヲ下リテ、再ヒ支那海ニ出デ、東航スルコト四晝夜計ニシテ香港ニ着キヌ。香港ハ支那廣東州ニ近キ一小島ナリ、地勢ハ支那ニ屬スレドモ、今ハ英領タリ。此ノ港ハ我ガ國ノ長崎ニ似テ、市街皆山ノ半腹ニ在レバ、街路坂多シ。外國人モ多ク入リ込ミタレドモ、元支那ノ土地ナレバニヤ、支那人ノ盛大ナル商業ヲナス者甚ダ多シ。人力車ハ我ガ國ニテ創製シダル者ナルガ、次第ニ外國ニ傳リテ、今ハ支那ノ諸港、さいごん、しんがぽうる等ニテモ多ク之ヲ用フ。

香港ヲ出デテ支那ノ南海岸ニ沿ヒ、更ニ東海岸ニ沿ヒ、臺灣ノ海峽ヲ過ギ、凡五晝夜ニシテ楊子江ノ河口ニ達シヌ。是ヨリ江ヲ溯リテ吳淞ト云フ所ニ至リ、此ニテ小汽舩ニ移リ、猶上リ行クコト二三里ニシテ上海ニ着キヌ。楊子江口ハ廣大ニシテ、舩中流ニ

金港堂書籍株式會社

在ルトキハ、兩岸ヲ望ミテ明カニ見ルコト能ハズ。水濁リテ黄色ナリ。上海近傍ハ總ベテ平地ニシテ山ヲ見ズ。

上海ハ支那東部ノ大市ニシテ、商業ノ盛ナルコト香港ニ勝ルベシ。英、佛、米等ノ諸國各市街ノ地ヲ分チ領シ、家屋等全ク歐洲ノ都府ノ如シ。支那人ハ別ニ城内ト稱スル所ニ住ム。城廓ハ石ヲ以テ築キ、諸方ニ門アリ、城内街路甚ダ狹クシテ、馬車ハ固ヨリ通セズ、人モ二人相並ビテハ行キ難カラン。家屋街路共ニ汚穢ニシテ、其氣鼻ヲ撲チ、殆人ヲシテ嘔吐セシム。

船上海ニ碇泊スルコト一晝夜ニシテ、揚子江ヲ下リ東海ニ出デテ、我ガ日本ニ向ヒヌ。まるせいゆヲ出デテヨリ四十餘日、此處彼處ニ寄港シテ心モ漸ク倦ミタルニ、此ノ次コソハ我ガ國ナレト思ヘバ、喜バシサ限ナカリキ。上海ヨリ二晝夜計ニシテ九州ノ北ニ達シ、雲霧ノ間ニ先豐筑ノ山々見エタリ。既ニシテ陸ニ近ヅキ、島嶼モ數多船ノ前後ニ現レ、白帆揚ゲタル舟サヘ遠近ニ見エタリ。船ハ下ノ關ヲ過ギテ内海ニ入リ、其レヨリ一晝夜ニシテ神戸ニ碇泊セリ。香港ヲ出デテヨリ氣候次第ニ寒冷ニ赴キシカ

バ、舩ノ内海ニ入リシトキ四國ノ山々ヲ望ミシニ、皆白雪ヲ戴ケリ」、方ニ是レ一月半ノ事ナレバサモアルベキナリ。

神戸ニテ上陸シ、諏訪山ニ遊ビテ、翌日復舩ニ歸リ、是ヨリ一晝夜ニシテ横濱ニ着キヌ。此ノ行前後殆六個月ニシテ、世界ヲ一周セリ。其ノ中三個月餘ハ舩ニ在リテ、他ノ三個月許ハ歐、米ノ都府ニ逗留セシナリ。「百聞一見ニ如カズ」、旅行シテ利益ヲ得ルコト尠カラザルナリ。

第九課　豊太閤

我ガ國古來豪傑ノ世ニ出デタルコト少カラズ。然レドモ多クハ累代ノ餘業ニ賴リ、又ハ祖先ノ德澤ニ出デタルモノナリ。而シテ身一分ノ奴僕ヨリ起リ、位關白ニ至リテ、人臣ノ榮ヲ極メ、天下ノ實權ヲ主宰セシ英雄ハ、二千五百有餘年ノ歷史上、前後唯一ノ豊臣秀吉アルノミ。

秀吉ハ尾張ノ國愛知郡中村ノ人ニシテ、父ハ彌助ト云ヘル村民ナリ。秀吉幼名ヲ日吉ト云フ、年少ノ

時已ニ非凡ノ氣象アリシガ、長ズルニ及ヒテ愈、大志ヲ懷ケリ。二十歳ノ時、遠江ニ往キ松下之綱ニ仕フ。後故アリテ之綱ノ許ヲ去リ、自ラ姓名ヲ木下藤吉郎ト稱シ、尾張ノ國主織田信長ノ他出ヲ伺ヒ、遂ニ謁シテ仕ヘンコトヲ求ム。信長之ヲ熟視シ、笑ヒテ曰ク「汝ガ面ハ沐猴ニ肖タリ、必敏捷ナラン。」ト。遂ニ收メテ草履取トナシケルニ、藤吉郎奉仕甚ダ勤メタリ。

信長居ル所ノ清洲ノ城壁壞レケレバ、吏ニ命ジテ之ヲ修理セシメシニ、月ヲ彌リテ成ラズ。一日藤吉郎城下ヲ過キ、之ヲ視テ歎シテ曰ク「嗚呼危イカナ。」ト。

信長之ヲ聞テ詰問シケルニ、藤吉郎對ヘテ曰ク「今我ガ君ノ領國、東ニ今川、武田氏アリ。西ニ齋藤、淺井、六角氏アリテ、日ニ我ガ隙ヲ伺ヘリ。然ルニ城ノ修理斯ク久シク成ラズシテハ甚ダ危シ。是レ畢竟有司等我ガ君ノ爲メニ謀ルコト忠ナラザルニ由レリ。」ト。信長沈思スルコト良久シカリシガ、ヤガテ藤吉郎ニ命シテ其ノ工事ヲ董サシメキ。

藤吉郎盡ク工夫ヲ會シ、君命ナリトテ酒食ヲ賜ヒ、而シテ後之ヲ分チテ十隊トナシ、一隊ヲ以テ十歩ニ充テ、自ラ之ヲ督勵セシカバ、僅ニ兩日ニシテ修理全

ク成就ス。信長大イニ嘆賞シ、直チニ俸ヲ加ヘテ更ト爲セリ。後屢奇策ヲ運ラシテ軍功ヲ奏スルコト多カリケレバ、更ニ三千貫ノ邑ヲ賜ヒ、名ヲ秀吉ト命ゼラル。

信長晩ニ毛利氏ヲ征シ、秀吉ニ命ジテ大將タラシム。是ノ時秀吉請ヒテ曰ク「此ノ行毛利氏ヲ征服セバ、臣ハ直チニ九州ニ進入シテ之ヲ略定セン。其ノ時、君願ハクハ臣ニ九州一歳ノ租入ヲ賜ヘ、臣ハ之ヲ軍資トシテ朝鮮ニ進入シ、彼ノ八道ヲ蹂躪シ、更ニ進ミテ明國ニ入リ、直チニ北京ヲ衝キ、彼ノ四百餘州ヲ從ヘテ、悉ク我國俗ニ化セシメン。」ト。信長笑ヒテ曰ク「汝又例ノ大言スルカ。」ト。然ルニ軍半ナルニ、信長不幸ニシテ其ノ臣明智光秀ノ爲メニ弑セラレキ。是ノ時信長ノ親族宿將等、多クハ觀望シテ敢テ先賊ヲ討ズル者ナカリケルニ、秀吉、大膳ニモ敵ノ毛利氏ニ實情ヲ明カシテ之ト和睦シ、直チニ討賊ノ義旗ヲ翻ヘシテ、唯一戰ニ逆賊光秀ヲ誅滅シタリキ。

是ヨリ秀吉ノ威名日ニ熾ンニナリ、天正十一年柴

田勝家等ヲ滅シテ美濃、越前ヲ定メ、十二年長曾我部氏ヲ亡シテ四國ヲ平ゲ、十五年島津氏ヲ降シテ九州ヲ定メ、十八年北條氏ヲ滅シテ東國ヲ平ゲタリ。

斯ク已ニ全國ヲ平定シタレドモ、猶之ヲ以テ足レリトセズ、使ヲ朝鮮ニ遣ハシテ朝貢ヲ徵シキ。然ルニ朝鮮之ニ答禮セザリシカバ、秀吉奮然トシテ諸將ニ令シ、大軍ヲ興シテ朝鮮ニ攻メ入リ、八道ヲ席卷シテ屢明ノ援兵ヲモ破リタリ。是ニ於テ明大イニ懼レテ和ヲ議シ、使ヲ遣ハシテ冊書ヲ秀吉ニ獻ゼリ。然ルニ其ノ書中、汝ヲ封ジテ日本國王トナス。」ノ語

アルニ至リ、秀吉烈火ノ如ク怒リテ曰ク、「吾日本ヲ宰制ス、王タラント欲セバ則チ王タランノミ。豈羈縻ノ封ヲ受ケンヤ。且吾ニシテ王タラバ、天朝ヲ如何スルゾ。」トテ、立チドコロニ冊書ヲ引キ裂キ、使者ヲ逐ヒテ、即日再征ノ令ヲ下シキ。其ノ膽略ノ雄壯ニシテ行爲ノ快活ナルコト、今尚目ニ在ルガ如シ。賴山陽槊府ヲ作リテ云ク、

史官讀到日本王。　相公怒裂冊書。
欲王則王吾自了。　朱家小兒敢爵余。
吾國有王誰覬覦。　叱咤再蹂八道血。

鴨綠之江鞭可絕。　地上阿鈞不相見。

地下空嗟恭獻面。

斯クテ慶長三年ニ至リ、朝鮮ノ役未ダ已マサルニ、會秀吉病ミテ斃ズ、年六十三ナリキ。其ノ死セントスルニ臨ミ、忽チ目ヲ開キテ、「我ガ十萬ノ兵ヲシテ異域ノ鬼トナラシムル勿レ。」ト言ヒ畢リテ瞑セリ。初秀吉ノ信長ニ仕フルヤ、丹羽長秀、柴田勝家ノ威名ヲ羨ミ、自ラ姓ヲ羽柴トナシヽガ、後更ニ豊臣ト改メ、奏請シテ關白ニ任セリ。晩年職ヲ其ノ甥秀次ニ讓ルニ及ビ、自身ハ太閤ト稱セリ。故ニ秀吉ヲ稱シテ豊太閤ト云フ。

第十課　楠正成ノ勤王　原漢文

是ノ時ニ當リ、帝笠置山ニ在リ、仲時時益之ヲ聞キ、兵ヲ遣ハシテ來リ攻メントシテ未ダ至ラズ。帝詔ヲ四方ニ下シテ、難ニ赴カシム、後命ニ應ズル者ナシ。帝憂迫ス、適夢ミル、紫宸殿ノ南ニ大樹アリ、樹下ニ虛位ヲ設ク。二童子來リ、涙ヲ垂レテ白シテ曰ク「天下地トシテ陛下ヲ容ルヽナシ、獨此ノ坐アルノミ。」ト。既ニ覺メテ自ラ念フ、文ニ、木南ニ從フ、ハ楠ナリ、當

二姓楠ノ人アリ、出デテ朕ヲ扶ケ以テ禍難ヲ定ムベシト。因リテ山僧ヲ召シテ之ニ訪ヒテ曰ク「地方ノ豪傑豈姓楠ト云フ者アルカ」ト。

對ヘテ曰ク「金剛山ノ西ニ楠正成ト云フ者アリ、正成ノ父嘗テ子ナキヲ憂ヒ、其ノ妻ト志貴山ニ禱リテ之ヲ生メリ。小字ハ多聞、長ジテ材武ヲ以テ名アリ。嘗テ土寇ヲ平ゲ、功ヲ以テ兵衛尉トナレリ。」帝曰ク「是ナリ。」

中納言藤原藤房ヲシテ往キテ正成ヲ召サシム。正成即チ意ヲ決シテ之ニ赴キ、藤房ニ從ヒテ行在ニ

詣ル。帝藤房ヲシテ言ハシメテ曰ク「賊ヲ討ズルノ事、朕一ニ以テ汝ニ託ス」ト。因リテ坐ヲ命ジテ計ヲ問フ。正成感激シテ對ヘテ曰ク「天誅時ニ乘ゼリ、何ノ賊カ斃レザラン、東夷ハ勇アリテ智ナシ、如シ勇ヲ較ベンカ、六十餘州ノ兵ヲ擧グルモ以テ武藏、相模ニ當ルニ足ラズ。智ヲ較ベンカ則チ臣策アリ。然リト雖、勝敗ハ常ナリ、少シク挫折スルヲ以テ其ノ志ヲ變ズベカラズ。陛下苟モ正成未ダ死セズト聞カバ則チ從容應ヲ勞スルコトナカレ」ト。乃チ拜辭シテ還ル、實ニ元弘元年八月ナリキ。

頼山陽日本外史

第十一課　忠君

臣民たる者の君に事ふる道を稱して忠といふ。忠とは我が誠意を盡くして毫も私心なきことなり

されば臣民として君に事ふるは、猶子として親に事ふるが如く、至誠を旨として、ひたすら其の恩に報ゆることを務めざるべからず。古來忠孝を併べ稱して人の大節とせるは、人の勤むべき行多しと雖、子として孝を盡くし、臣として忠を盡くすを以て第一の行となせばなり。古語に「忠臣ハ孝子ノ門ヨリ出ブ。」といひ、又「孝ヲ以テ君ニ事フレバ則チ忠ナリ。」といへるも、親に對すると君に對するとの別こそあれ、至誠を要するに至りては、君親共に相同じければなり。

抑、我が國は、外國の如く異姓の帝王代る々々起りて其の民に臨み、君と臣民との間に固き恩義なき者とは遙かに異なれり。我が國の君と仰ぎ奉るは、天地開闢の初、此の土に君臨し給ひし天祖天孫の御裔にましまし、吾等臣民は、世々其の洪恩に浴せし者の子孫なり。故に我が國君臣の分は、天地開闢の昔より定り、此の名分は將來數萬世を重ぬと雖、決して渝

金港堂書籍株式會社

ることなし。是れ我が國體の萬國に卓絶したる所にして、亦吾等臣民の最も忠節を重んずべき所なり。

忠を盡くすの道は、世の治亂に由り人の身分に由りて、其の趣を同じくせずと雖、其の守るべき節操に至りては、毫も異なる所なし。治平の世に在りては、官に在る者は其の職事を勤めて上に奉じ、民間に在る者は尊敬の誠意を致して上に奉ずべし。一旦國家の安危休戚に關する事起るに及びては、官に在る者と民間に在る者とを問はず、身命を抛ちて皇室を擁護し奉るべきなり。菅原道眞が身を顧みずして職事を勤めしが如き、楠正成父子が忠義の爲めに命を鋒刃に殞しゝが如き、其の趣は異なりと雖、節操の堅きに至りては、聊も異なることなきなり。

筑波根の
このもかのもに影はあれど
君がみかげにまさる影はなし。

古今集

山はさけ
海はあせなむ世なりとも
君にふたごころ吾あらめやも。

新勅撰集

第十二課　熱

諸子太陽ニ面スルトキハ甚ダ熱キヲ感ズベク、火ニ近ヅクトキモ亦熱キヲ感ズベシ。是何ニ由リテ然ルカ、即チ太陽又ハ火ヨリ發スル熱ヲ身體ニ感ズルガ故ナリ。其ノ身體ニ受クル熱ノ感覺ヲ溫度ト名ケ、熱ヲ發スル物體ヲ熱體ト名ク。今熱ヲ發スル原因ノ大ナルモノヲ擧ゲンニ、第一ハ太陽ノ吾カ地球ニ與フル熱ニシテ、其ノ廣大ナルコト言語ニ悉シ難シ。次ハ薪炭ヲ焚キテ起ル熱ナリ。其ノ他物ヲ摩擦スルトキニ起ル摩擦熱、化學上ノ働ニテ物ノ化合スルトキニ起ル化合熱等アリ。

蓋萬物皆多少ノ熱ヲ含マザルハナキモ、其ノ溫度ニ高低アリテ、高キ者ハ之ヲ熱シト呼ヒ、低キ者ハ之ヲ冷カナリト呼フノミ。而シテ最モ奇トスベキハ、冷熱ノ二物ヲ相接スレバ、熱物其ノ溫ヲ冷物ニ傳ヘ、二物ノ溫度遂ニ平均シテ高低ノ差ナキニ至ルノ一事ナリ。試ニ一小石ヲ取リテ之ヲ手中ニ握レ、然ルトキハ手中ノ溫氣小石ニ傳リテ、手ト石ト其ノ溫度遂ニ平均スルヲ見ン。其ノ初、手掌ガ石ノ冷カナル

ヲ覺エシハ、即チ我ガ體溫ノ手中ヨリ出デテ石ニ傳ルガ爲メナリ。

又右手ヲ熱湯ニ投シ、左手ヲ冷水ニ浸シ、後兩手ヲ出シテ同シク之ヲ微溫湯ニ入ルレバ、左手ハ暖カナルヲ覺エ、右手ハ冷カナルヲ覺ユベシ。是レ左手ハ微溫湯ノ溫ヲ取リ、右手ハ手ノ溫ヲ失フニ由レリ。是ヲ以テ見レバ、冷モ亦冷ト稱スル實物アルニ非ズシテ、特ニ溫度ノ至微ナルト、溫ノ我ヲ去ルトノ感覺ニ外ナラズ。

萬物熱ニ逢ヘバ、其ノ分子融解ス、至リテ堅キ者ト雖、皆此ノ法ニ遵ハザルハナシ。故ニ熱度益、加レバ、分子ト、分子トノ間隙モ亦隨ヒテ增加ス。例ヘバ一ノ鐵棒ヲ取リ、之ヲ火中ニ投シテ益、熱度ヲ加ヘ、其レヲシテ紅色ナルニ至ラシムレバ、必其ノ長サト太サヲ增加スベシ。

又藥罐ノ水沸騰シテ其ノ口ヨリ溢レ出ヅルコトアルハ、是レ熱力ノ爲メニ水ノ膨脹スルガ故ナリ。今半バ空氣ヲ充タセル膀胱ノ口ヲ緊シク括リテ爐邊ニ置クトキハ、膀胱內ノ空氣漸ク脹大ニナリ、テ膀胱ハ竟ニ破裂スルニ至ルベシ。是レ亦熱ノ働ナリ。

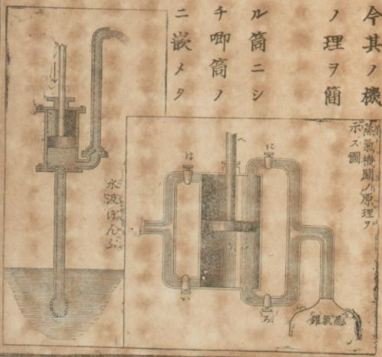
金港堂書籍株式會社

熱ノ効用此クノ如ク大ナルヲ以テ宇宙間ノ萬物、其ノ德ヲ蒙ラサルモノナシ。殊ニ熱ノ力ニ由リテ操作ヲ爲サシムルガ如キハ、最モ世ヲ益スル者ト謂フベシ。蒸氣機關ハ、即チ熱ヲ以テ水ヲ沸騰セシメ、其ノ力ニ由リテ操作ヲ爲サシムル者ナリ。

第十三課　蒸氣機關

蒸氣機關ハ、其ノ外見頗入リ組ミテ、容易ニ運動ヲ起スノ理ヲ解スベカラサルガ如シト雖通常ノ唧筒ノ理ヲ解スルトキハ、亦容易ニ蒸氣機關ノ理ヲモ解スルコトヲ得ベシ。今其ノ機關ノ運動ヲ起ス所以ノ理ヲ簡短ニ示スベシ。

下圖ノほハ堅固ナル筒ニシテ、之ヲ汽筒ト云フ、即チ唧筒ノ筒ノ如シ。へハ汽筒ニ嵌メタル棒ニシテ、之ヲ銲又ハぴすとんろつとト云フ。此ノ棒ハ汽筒中ヲ上下スベク作レ


水波ぽんぷ
蒸氣機關ノ原理ヲ示ス圖
ほ
へ
と
ち
ぬ
ぬ
ち
と
ほ
ぬ
ち
ぬ
ち
ぬ
ち

リ、即チぽんぷノ抽推杆ノ如シ。

サテ蒸氣鑵ヨリ發スル蒸氣、先圓筒ノ下部ニ入リ、其ノ力ニテぴすとんろつどヲ圓筒ノ頂ニ推シ昇ス。此ノ時ろ辮閉ヂテ、鑵ヨリ來ル蒸氣ノ通路絶エ、而シテい辮開キテ圓筒内ノ蒸氣、空氣中ニ散逸ス。次ニ鑵ヨリ來ル蒸氣に辮ヲ過ギテ、圓筒ノ上部ニ入レバ、其ノ力ニテぴすとんろつどヲ圓筒ノ下底ニ推シ降ス。此ノ時に辮閉ヂテ、は辮開キ、上部ノ蒸氣外出シ、蒸氣更ニぴすとんろつどノ下ニ入レバ、ぴすとんろつどハ前ノ如ク再ヒ昇リ、上ニ入レバ又降リテ、一上一下曾テ止ムコトナシ。

サテ此ノぴすとんろつどノ上端ヲ以テ、其ノ運動セシムベキ機械ニ連絡スレバ、則チ種々ノ働ヲ起ス。例ヘバ鐵道ノ列車ヲ輓キ、又ハ工場ノ器械ヲ運轉スル等ソ如キ是ナリ。又此ノ機關ガ一分時間ニ爲ス所ノ働、一馬ノ力ニ均シキトキハ、之ヲ一馬力ト云ヒ、十馬ノ力ニ均シキトキハ、之ヲ十馬力ト云フ。

抑、蒸氣ヲ用ヒテ運動力トナスノ發明ハ、今ヲ距ルコト凡ソ二百年前、英國ノうーすとる矣ト云ヘル人、獄中ニ在リシトキ、藥鑵ノ湯ノ沸騰シテ其ノ蓋ヲ搖カスヲ視テ、初メテ蒸氣ニ非常ノ力アルコトヲ悟リ、遂

ニ蒸氣力ヲ用ヒテ、水ヲ四十尺ノ高處ニ上グベキ機械ヲ工夫セシニ起ル。是レ即チ今ノ蒸氣喞筒ノ由來ナリ。

其ノ後、百餘年ヲ經テ、同國ニ志ーえーむす、わつとト云ヘル非凡ノ人物出デ、初メテ完全ナル蒸氣機關ヲ構造セリ。其ノ後又英國ニ志ようち、すてふんそんト云ヘル人出デ、始メテ蒸氣機關ヲ行動器ニ適用スルコトヲ工夫シタリ。是レ即チ汽車ノ始ナリ。

第十四課　志ーえーむす、わつと

鐵瓶ノ湯ノ沸騰スルトキ、其ノ蒸氣ノ鐵瓶ノ蓋ヲ搖カスコトハ、數千年來世人ノ目擊セシ所ナルベシ。然レドモ此ノ氣ニ船車ヲ運轉セシムベキ絶大ノ力アリテ、適當ナル仕掛ヲ設クルトキハ、世界ノ有様ヲ一變セシムベキ程ノ事業ヲ仕遂グベシトハ、何人モ夢ニダニ想ハザリシ所ナルベシ。獨此ノ發明ニ先鞭ヲ着ケタルハ、前ニ言ヘル、うすとる侯ナルベケレドモ、侯ト雖、未ダ完全ナル蒸氣機ヲ發明シタルニハ非ズ。僅ニ其ノ一斑ヲ窺ヒ得テ聊ノ工夫ヲ成シタルニ過ギズ。其ノ之ヲ大成シテ完全ナル機關ヲ

構造シ、世ノ文明ニ至大ノ利器ヲ與ヘタル元祖ハ、前後只一ノ志ーエーむす、わつとアルノミ。

此ノ非凡ナル人物ハ、今ヲ去ルコト、凡百六十年、英國ナルすこつとらんどノぐりいのつくニ生マレ、其ノ父ハ一ノ船大工ナリキ。わつとゝ幼少ニシテ伯母ノ許ニ養ハレシ頃、日々勝爐ニカケタル藥鑵ノ前ニ蹲リテ、噴

キ出ツル蒸氣ヲ匕ニテ受ケ、其ノ露ヲ結ヒテ滴々ト落ツルヲ數ヘ居タリ。伯母ハ屢、其ノ怠惰ニシテ時間ヲ徒費スルヲ戒メケレドモ、わつとゝ曾テ聽カザリケレバ、遂ニ無用ノ鈍物トシテ捨テ置キケリ。誰カ知ラン、此ノ無用ノ鈍物ハ、蒸氣ノ力強キヲ思ヒ、蒸氣ノ凾エテ水ニ還ルヲ思ヒテ日夜工夫ヲ怠ラザリシコトヲ。

わつとゝ十八歲ノ時、首府ろんどんニ行キテ數學器械ノ製造ヲ習ヒ、幾バクモ無クシテ鄉國ナルぐらすごう大學校ノ御用器械師トナレリ。然レドモ世間

ノ人わつとヲ愚弄輕蔑スルコト猶止マザリキ。何ントナレバわつとハ日々獨屋敷ニ外リ、黙然トシテ日光ニ晒サルヽコト半日ニ餘リケレバナリ。

わつとハ人ノ侮ヲ受クルモ事トモセズ、其ノ志氣確乎トシテ毫モ撓マザリキ。斯クテ一日大學校ヨリ蒸氣機ノ修繕ヲ托セラレシガ、是ゾわつとガ偶然ニ一大發明ヲ爲シヽ原由ナリケル。抑此ノ器械ハにうこめんト名クル側式ニシテ、其ノぴすとんろつとハ汽筒中ノ蒸氣ニ由リテ推シ上ゲラルヽモ、之ヲ推シ下グルニハ、其ノ蒸氣ヲ冷シテ水ト爲シ、同時ニ汽筒ヲモ冷ササルベカラズ。故ニぴすとんろつとヲ更ニ推シ上ゲントスルニハ、一タビ冷エタル汽筒ヲ再ビ熱スベキ必要アリ。サレバぴすとんろつとヲ推シ上グルハ蒸氣ノ力ナレドモ、之ヲ推シ下グルハ空氣ノ力ナリキ。

わつとハ思ヘラク「汽筒ノ一冷一熱ハ徒ラニ多量ノ熱ヲ失ヒ、隨ヒテ燃材ヲ費スコト夥シ、斯カル器械ヲ使用センニハ、益ヲ收ムルコト極メテ少カルベシ。」ト。因リテ更ニ汽筒ヲ冷サズシテ、其ノ中ノ蒸氣ヲ冷スベキ工夫ヲ凝ラシケルガ、數月ノ後初メテ一ノ妙計ヲ案シ出セリ。即チ蒸氣ヲ汽筒ノ中ニテ冷サ

ズシテ、之ヲ他ノ器ニ移シテ、冷スノ一事ナリ。斯クスレバ汽筒ヲ冷スコトナクシテ常ニ熱ヲ保ツベシ。此ノ案成リテ後ハ、破竹ノ勢ヲ以テ發明ノ度ヲ進メ、竟ニびすとんろつとノ一上一下、繼ベテ蒸氣ノ力ヲ用フルノ仕掛ヲ大成シタリ。

斯カル發明アリテ後ハ、百般ノ工業ニ蒸氣機ヲ使用スルノミナラズ。水ヲ行ク舟、陸ヲ走ル車モ、皆蒸氣力ヲ用ヒテ、宛一瞬百里ヲ過グルノ實アルニ至リタリ。サレバいきりす一國ニ用フル所ノ蒸氣ノ作業ヲ計算スルニ、大凡五百万人ノ力ニ倍シト云フ。

是レ則チ衣食ヲ要セザル職工五百万人ヲ與ヘタル理ニ非ズヤ。嗚呼わつとガ其ノ本國ノミニ施シタル利益スラ、其レ此クノ如ク廣大ナリ。之ヲ世界ニ被ラシメタル利益ノ大ナルコト誠ニ量リ知ルベカラズ。

わつとハ晩年心ヲ學問ニ潛メ、一ニ國益ヲ興スヲ以テ樂ミトシタリ。後遂ニ學士會員ニ擧ゲラレ、法律博士ノ名譽學位ヲ得、八十四歳ノ長壽ヲ保チテ、榮譽幸福ノ中ニ一生ヲ終リヌ。

第十五課　輸出輸入

我ガ國ニ餘リアル物産ヲ外國ヘ賣リ出スヲ輸出ト云ヒ、我ガ國ニ不足セル物品ヲ外國ヨリ買ヒ入ルヽヲ輸入ト云フ。輸出輸入ヲ爲スコトヲ總ベテ貿易又ハ互市トモ云フナリ。

我ガ國輸出品ノ重ナル者ハ、生絲、製茶ヲ第一トシ、次ハ諸種ノ海産物、米穀、陶磁器、漆器、銅器、藏物、石炭、燐木等ナリ。輸入品ノ重ナル者ハ、いきりすノ木綿糸、金巾、あめりかノ石油、支那ノ砂糖ヲ第一トシ、次ハ諸種ノ器械、毛織物、鐵條、藥劑等ナリ。此等ノ貿易ノ盛ニ行ハルヽハ、横濱ヲ第一トシ、神戸、長崎、函館之ニ次グ、而シテ新潟ハ最モ微ナリ。

此ノ五港ノ外、特別輸出港ノ設アリ。其ノ港ニテハ、米、麥、麥粉、石炭、硫黄ノ五品ヲ輸出スルコトヲ許サル。即チ伊勢ノ四日市、長門ノ赤馬關、筑前ノ博多、豐前ノ門司、肥前ノ口之津、唐津、肥後ノ三角、越中ノ伏木、後志ノ小樽、釧路ノ釧路等ハ、特別輸出港ナリ。

抑、輸出品ト輸入品ノ釣合ヲ保フハ、國ノ經濟上最モ肝要ノ事ナリ。若シ輸入品ノ價ノ總額、輸出品ノ

價ノ總額ニ越ユルトキハ、越エタル高ノ金銀、外國ノ有ニ歸シタル理ニテ、則チ我ガ國ノ不利トナル。之ニ反シテ、輸出品ノ總額、輸入品ノ總額ニ越ユルトキハ、越エタル高ノ金銀、又我ガ國ノ有ニ歸シタル理ニテ、則チ國ノ利トナルベシ。是レ恰モ一家ニテ、年々出金ノ高ト入金ノ高トニ異同アリテ、或ハ利益トナリ或ハ損失トナルガ如シ。是ヲ以テ各國互ニ相競ヒテ物産ヲ增殖シ、國ヲ富マサンコトヲ務ムルナリ。

我ガ國ニテモ、以前ハ唯坐ナガラ外國ト貿易スルノミナリキ。然ルニ近來ハ追々外國ヘ渡リテ貿易ヲ爲シ、其ノ地ニ商店ヲ開ク者出テ來リシカバ、輸出ノ物品モ次第ニ增加セリ、是レ誠ニ喜ブベキコトナリ。

明治廿四年ニハ、輸出品ノ總額七千九百五十二万七千二百七十圓ニシテ、輸入品ノ總額六千二百九十二万七千二百六十八圓ナリキ。サレバ差引千六百六十萬四圓ハ我ガ國ノ利トナリタル道理ナリ。諸子成長ノ後、各、業ヲ爲スニ至ラバ、亦務メテ國産ヲ增殖スルコトヲ計ルベシ。

第十六課　租稅

市町村ニハ市町村ノ入費アリ、府縣ニハ府縣ノ入費アリ、國ニハ國ノ入費アリ。故ニ國民タル者、各、分ニ應シ業ニ從ヒテ租稅ヲ納メ、此ノ入費ニ充ツベキハ勿論ノ事ナリ。

租稅ニハ種々ノ名アリ。人若シ田畑、山林、宅地等ヲ所有セバ、土地臺帳ニ記載セル地價百分ノ二分五厘ニ當ル稅金ヲ納メザルベカラズ、是レ即チ地租ナリ。若シ又一箇年三百圓以上ノ所得アラバ、其ノ所

得高ノ多少ニ應ジテ稅金ヲ納メザルベカラズ、是レ即チ所得稅ナリ。鉱若シクハ車ヲ所有セバ、亦其ノ稅ヲ納メザルベカラズ、是レ即チ鉱車稅ナリ。又生絲、製茶ノ類ヲ外國ヘ輸出セントセバ、其ノ物品ノ元價量目ニ應ジテ稅金ヲ稅關ニ納メザルベカラズ、是レ即チ海關稅ナリ。其ノ他酒類ヲ醸造センニハ、酒造稅ヲ納ムベク、菓子ク製センニハ、菓子稅ヲ納ムベク、烟草或ハ藥品ヲ商ハンニハ、烟草稅、賣藥稅ヲ納ムベシ。此等ノ諸稅ヲ名ケテ國稅ト云フ。證券印稅、鑛山稅、國立銀行稅等モ亦皆國稅ナリ。國稅ハ直チ

二國庫即チ大藏省ニ納ル者ニシテ、政府ハ之ヲ以テ全國一般ニ係ル公ノ費用ヲ支辨ス。

次ニ其ノ住居スル府縣ニ對シテ、地租ニ割リ付ケタル稅、戶數ニ割リ付ケタル稅、及ヒ種々ノ雜稅ヲ納メザルベカラズ。又商賣ヲ爲セバ、營業上ノ稅金ヲ納メザルベカラズ。此等ノ地租割、戶數割、雜種稅、營業稅ヲ總ベテ府縣稅ト名ク。府縣稅ハ府縣ノ金庫ニ納ル者ニシテ、府縣廳ハ之ヲ以テ其ノ府縣限ノ土木、衛生、警察、教育、郡役所費、府縣會費等ヲ支辨ス。

我等ノ住居スル市町村ニハ、公立小學校アリ、市町村役場アリ、市町村會ヲ開クコトアリ

其ノ他市町村ノ都合ニ由リテ、或ハ川ヲ普請シ、或ハ橋ヲ架ケ、或ハ道路ヲ修繕スルコトモアラン。又傳染病流行ノ時ニハ、下水ヲ浚ヒ、井水ヲ清メ、石炭酸ヲ撒布スル等ノ事モアラン。是レ皆我等ノ利益ノ爲メニ費ス所ノ費用ナレバ、我等ハ固ヨリ其ノ費用ヲ拂ハザルベカラズ。

サテ市町村ニハ市町村公有ノ財産ト云フ者アリテ、是ヨリ年々收入アルベク、又其ノ他ニモ多少ノ收入アルベシ。市町村役場ニテハ、此ノ收入ヲ以テ前

ニ述ベタル諸費用ヲ支辨シ、尚不足スルトキハ、國稅府縣稅ニ附加シテ稅ヲ徵收スルコトアリ、之ヲ名ケテ附加稅ト云フ。又市町村ノ公事ニ付キ、已ムヲ得サル必要起ルトキハ、其ノ市町村限、或名義ヲ以テ稅ヲ割リ當テ徵收スルコトアリ、之ヲ名ケテ特別稅ト云フ。市町村稅トハ即チ此ノ附加稅、特別稅ナリ。

以上國稅、府縣稅、市町村稅ノ三種ヲ總ベ稱ヘテ、租稅トハ云フナリ。

抑、政府ハ何故ニ斯ヲ稅源ヲ種々ニスルカ。何故ニ各人ノ所得ニ就キテ一樣ニ稅ヲ課セザルカト云フ者アラン、ソハ次ノ答ヲ以テ之ヲ說明セン。

第一、世ニハ已レノ所得ヲ正實ニ報告セザル不正ノ人アルベシ。然ルトキハ正直ナル人、常ニ詐僞ヲナス者ヨリモ多クノ稅ヲ課セラルヽ事トナルナリ。

第二、高貴柄ニ因リテハ、精密ニ其ノ所得ヲ撩算シ難キ者アリ。第三、稅ヲ一樣ニ定ムレバ、一時ニ出スベキ金額甚ダ多カルベキ故、多クノ人ハ之ヲ拂フニ困マン。故ニ政府ハ種々ノ稅源ニ因リテ諸稅ヲ賦課シ、成ルベク不同ナキヤウ衆人ニ行キ渡ラセ、且其ノ重サヲ感ズルコト少カラシメント務ムルナリ。

第十七課　地方自治

明治廿一年四月、市町村制ヲ發布セラレ、市町村ヲ以テ自治體トナセリ。自治體トハ恰モ吾人ガ自家ノ財産ヲ所有シ、之ヲ授受賣買シ、他人ト契約ヲ結ブノ權利ヲ得、及ヒ之ニ對スル義務ヲ負フガ如ク、其ノ區域内ハ、自ラ獨立シテ之ヲ統治スルノ謂ナリ。

抑、自治體ハ各自獨立ノ機關アリテ其ノ意思ヲ發表シ、又之ヲ執行スルコト、猶國ニ政府アルガ如シ。然レドモ自治體ハ元國ノ一部分ナルヲ以テ常ニ國家監督ノ下ニ屬スベキハ勿論、其ノ機關ノ如キモ亦皆國法ノ定ムル所ニ依リテ組織セラル。斯ク自治ノ制ヲ施サレシガ故ニ、凡一市町村内ニ住居スル者ハ、總ベテ其ノ市町村住民トシテ、公共ノ營造物幷ニ市町村有ノ財産ヲ共用スルノ權利ヲ有シ、及ヒ市町村ノ負擔ヲ分任スルノ義務ヲ負フコト勿論ナリ。凡帝國臣民ニシテ、二年以上市町村ノ住民トナリ、其ノ市町村ノ負擔ヲ分任シ、及ヒ其ノ町村内ニ於テ地租ヲ納メ、若シクハ直接國税年額二圓以上ヲ納ムル者ハ、其ノ市町村ノ公民トス。而シテ市町村公民ハ

市町村ノ撰擧ニ與リ、又市町村ノ名譽職ニ擧ゲラルヽノ權利アリ。

市町村歳入、歳出ノ豫算ヲ定メ、市町村有ノ財産及ヒ營造物ノ管理方法ヲ定メ、其ノ他市町村ノ自治ニ關スル重要ノ事項ヲ議決スルガ爲メ、市町村會ヲ開ク。而シテ市町村會ノ議員ハ、即チ公民ノ撰擧スル所ナリ。

市町村ノ行政事務ヲ擔任スルガ爲メ、市ニハ市長、助役及ヒ名譽職、參事會員ヨリ成レル參事會ヲ置キ、町村ニハ町村長、助役ヨリ成レル町村役場ヲ置ク。

市長ハ市會ノ撰擧スル所ニシテ、上奏裁可ノ上、職ニ就キ、助役モ亦市會ノ撰擧ニ由リ、府縣知事ノ認可ヲ得テ職ニ就キ、名譽職、參事會員ハ、其ノ市ノ三十歳以上ノ公民中ヨリ之ヲ撰擧スル者トス。又町村長及ヒ助役ハ、町村會ニ於テ其ノ町村ノ三十歳以上ノ公民中ヨリ撰擧ス。是レ自治制ノ大略ナリ。

第十八課　千劒破の城攻　第一

千劒破の城の寄手は、前の勢八十萬騎に、又赤坂の勢吉野の勢馳せ加りて百万騎に餘りければ、城の四

方、二三里が間は、見物相撲の場の如く打ち圍みて、尺寸の地をも餘さず充ち滿ちたり。旌旗の風に飄りて靡く氣色は、秋の野の尾花が末よりも繁く、劒戟の日に映じて廻ける有樣は、曉の霜の枯草に布けるが如くなり。此の勢にも恐れずして、纔に千人に足らぬ小勢にて、誰を憑み何を待つともなきに、城中にこらへて防き戰ひける楠が心の程こそ不敵なれ。

此の城東西は谷深く切れて、人の上るべき樣もなし。南北は金剛山に續きて、而も峰聳にたり。されども高さ二町計にて廻一里に足らぬ小城なれば、何程

の事かあるべきと、寄手是を見侮りて、初一兩日の程は、向ひ陣をも取らず攻支度をも用意せず、我先にと城の木戸口の邊までかづきつれてぞ上りたりける。城中の者共は少しも驚かず、靜りかへりて、高櫓の上より大石を投げ懸け、投げ懸け、楠の板を微塵に打ち

碎きて、漂ふ處を差し詰め差し詰め射ける間、四方の坂より轉び落ち、落ち重りて手を負ひ死を致す者、一日が中に五六千人に及べり。長崎四郎左衛門尉、軍奉行にてありければ、手負死人の實檢をしけるに、軍筆十二人晝夜三日が間、筆をも置かず注せり。さてこそ今より後は、大將の御許なくして合戰したらんする輩をば、却りて罪科に行はるべしとぞ觸れられければ、軍勢暫く軍を止めて、先己が陣々をぞ構へける。

爰に赤坂の大將金澤右馬助、大佛奥州に向ひて宣ひけるは、「前日赤坂を攻め落しつるこそ全く士卒の

高名に非ず、城中の構を拵し出して水を留めて候ひしに依りて、敵程なく降參仕り候ひき。是を以て此の城を見候ふに、是程纔なる山の頂に用水あるべしとも覺え候はぬに、城中に水澤山にありけに見ゆるは、如何さま東の山の麓に流れたる溪水を夜々に汲むかと覺えて候ふ。あはれ宗徒の人々一兩人に仰せ付けられて、此の水を汲ませぬやうに御計らひ候へかし。」と申されければ、兩大將此の義然るべく覺え候ふ。」とて、名越越前守を大將として其勢三千餘騎を差し分けて、水の邊に陣を取らせ、城より人の下りぬ

べき道々に逆茂木を引きてぞ待ち掛けける。

楠は元來勇氣智謀相兼ねたる者なりければ、此の城を持へける初、用水の便りを見るに、五所の秘水そて嶮通る山伏の秘して汲む水此の嶮に在りて、滴るこそ一夜に五斛計なり。此の水如何なる旱にも干るこそなければ、形の如く人の口中を濡さんこそ相違あるまじけれども、合戰の最中は、或は火矢を消さん爲め、又喉の乾くこそ繁ければ、此の水計にては不足なるべしとて、大いなる木を以て水舟を二三百打たせて水を湛へ置きたり。又數百箇所作り設べた

る役所の軒に、鑓き樋を懸けて、雨ふれば雫を少しも餘さず舟に承け入れ、舟の底に赤土を沈めて、水の性を損ぜぬ樣にぞ持へける。此の水を以て、殘ひ五六十日雨降らずともこらへつべし、其の中に又なをかは雨降るこそ無からんと了簡しける智慮の程こそ淺からね。

されば城よりは強ちに此の谷水を汲まんともせざりけるを、水防ぎける兵共、夜毎に氣を詰めて今や々々と待ち掛けけるが、始の程こそあれ、後には次第々々に心懈り氣緩みて、此の水をば汲まざりけるぞ

そて用心の體少し無沙汰にぞなりにける。楠是を見澄まして、究竟の射手を摘へて二三百人夜に紛れて城より下し、まだ東雲の明け果てぬ霞隱れより押し寄せ、水邊に詰めて居たる者ども二十餘人を切り伏せて、透間もなく切つて掛りける間、名越越前守こらへ兼ねて、本の陣へぞ引かれける。寄手數萬の軍勢是を見て、渡り合はせんとひしめけども、谷を隔て尾を隔てたる道なれば、輙く馳せ合はする兵もなし。鬼角しける其の間に、捨て置きたる旗、大幕なんぞ取り持たせて、楠が勢靜かに城中へぞ引き入りける。

其の翌日城の大手に、三本傘の紋書きたる旗と同じき紋の幕とを引きて、「是こそ皆名越殿より給はりて候ひつる御旗にて候へば、御紋付きて候ふ間、他人の爲めには無用に候ふ、御内の人々是へ御入り候ひて召され候へかし。」と云ひて同音にどつと笑ひければ、天下の武士共之を見て、「あはれ名越殿の不覺や。」と口々に云はぬ者こそ無かりけれ。名越一家の人々此の事を聞きて、安からぬ事に思はれければ、當手の軍勢をも一人も殘らず城の木戸を枕にして討死をせよとぞ下知せられける。

金港堂書籍株式會社

是に因りて彼の手の兵五千餘人、思ひ切つて擊てども射れども物ともせず、乘り越え乘り越え、城の逆茂木一重引き破りて、切岸の下までぞ攻めたりける。されども岸高くして切り立ちたれば、心は猛く思へども上り得ず、唯徒らに城を睨み怨を押へて息づき居たり。此の時城の中より切岸の上に横たへて置きたる大木十計切つて落しかけたりける間、將棊倒をする如く寄手四五百人壓しに擊たれて死にけり。殘る兵共之を逃れんとしどろになつて驚ぐ處を、十方の櫓より指し下し思ふ樣に射ける間、五千餘人の兵共殘り少に擊たれて、其の日の軍は果てにけり。誠に志の程は猛けれども、唯仕出したる事もなくて、若干擊たれにければ、「あはれ恥の上の損哉。」と諸人の口ずさみは猶止まず。尋常ならぬ合戰の體を見て、寄手も侮りにくゝや思ひけん、今は始の樣に勇み進みて攻めんとする者も無かりけり。 太平記

第十九課　千劒破の城攻　第二

少し程經て後、正成いでさらば、又寄手をたばかりて居眠醒さん。とて、芥を以て人長なる人形を二三十

作りて、甲冑を着せ兵仗を持たせて、夜中に城の麓に置き、前に疊揷をつき雙べ、其の後に勝りたる兵五百人を交へて、夜のほのぼのと明けける霧の下より、同時に鬨をドッと作る。四方の寄手鬨の聲を聞きて、「すはや、城の中より打ち出でたるは、是こを敵の運の盡くる所の死に狂ひよ。」とて、我先にとぞ攻め合はせける。

城の兵無ねて工みたることなれば、矢軍ちを爲る樣にして大勢を近づけて、人形計を木隱れに殘し置きて、兵は皆次第々々に城の上へ引き上ぐる。寄手人形を誠の兵ぞと心得て之を擊たんと相集る。正成所存の如く敵をたばかり寄せて、大石を四五十計一度にはつと發す、一所に集りたる敵三百餘人やにはに擊ち殺され、半死半生の者五百餘人に及べり。

軍果てゝ之を見れば、あはれ、大剛の者哉と覺えて一足も引かざりつる兵は、人にはあらで皆藁にて作れる人形なり。之を擊たんと相集りて、石に擊たれ矢に中りて死せるも高名ならず、之を危みて進み得ざりつるも臆病の程顯れて云ひ甲斐なし、唯鬼にも角にも萬人の物笑ひとぞなりにける。是より後は

彌、合戰を止めける間、諸國の軍勢唯徒らに城を守り上げて居たる計にて、爲る業一つも無かりけり。

さる程に關東より飛脚到來して、軍を止めて徒らに日を送ることを然るべからずと下知せられければ、京徒の大將達評定ありて、御方の向ひ陣と敵の城との間に高く切り立てたる堀りに、橋を渡して城へ打ち入らんとぞ工まれける。是が爲め京都より番匠を召し下し、廣さ一丈五尺長さ二十丈餘りなる梯をぞ作らせける。梯既に作り出しければ、大繩を二三千筋附けて車を以て卷き立て、城の切り岸の上へぞ

釣し懸けたりける。やがて早り雄の兵共五六千人、橋の上を渡りて我先にと進みたり。

あはや、此の城只今打ち落されぬべく見えたる處に、楠無ねて用意やしたりけん、投松明の先に火を附けて橋の上に薪を積めるが如くに投げ集めて、水彈きを以て油を瀧の流るゝ樣に掛けたる間、火橋桁に燃え附きて、漢風炎を吹き布きたり。慾に渡り掛りたる兵共前へ進まんとすれば、猛火盛に燃えて身を焦がす、歸らんとすれば、後陣の大勢前の難儀をも知らずして支へたり、側へ飛び下りんとすれば、谷深く

巖崎えて肝を冷し、如何せんと身を揉んで押し合ふ程に、橋桁中より燃え折れて谷底へどうと落ちければ、數千の兵同時に猛火の中へ落ち重りて、一人も殘らず燒け死にけり。

太平記

第二十課　年の末

冬の末つ方にも至りぬれば、今年の日數殘り少く、暦の軸現はるゝ計にて、春の餅既に近し、年の終るは惜むべく、齡の重るは憂はしけれど、新しき年を迎ふるはめづらかにて喜ぶべし。其の頃は世の中の人、何くれと忙しくせき歎へず、多く罵りて走り惑ふを獨靜かに見る人は樂むべし。一年ははかなき夢の心地して過ぎぬれば、跡を顧みて切に名殘り惜むべし。老の身は月日もいとど立ち易く、何程もなき一年なるを、數へ添ふるも怨めし。されど人の世を經るは、思はずも變多き事なるを、一年の内爰なくて過ぎぬる人は又樂しからずや。春秋の暮れ行くなに名殘り惜むべし、まして一年の終の今日の日の夕暮に成りぬるをや。

もろこしの人は歳を守ると云ひて、今宵は終夜寐

ずとかや、是れ古きを送り新きを迎ふる心なるべし、送り迎へに付きて憂ひ喜び一方ならず。

第二十一課　冬

ちはやぶる
神無月とや今朝よりは
曇りもあへず打ちしぐれ
紅葉と共にふる郷の
吉野の山の山嵐も

寒く日毎に成り行けば、
玉の緒解けてこき散らし、
霰亂れて霜氷り
彌固れる庭の面に、
むら〳〵見ゆる冬草の
上に降り布く白雪の
積り〳〵て新玉の
年をあまたも過ぐしつるかな。

第二十二課　京傳

百年前、江戸ニ山東庵京傳ト云フ小說家アリキ。姓名ヲ岩瀨醒ト云ヒテ、學問見聞甚タ廣ク、文章流暢ニシテ美シク、近世小說ノ體裁ハ、此ノ人ニ至リテ初メテ整ヘリト云フ。其ノ著ス所ノ小說數十部、競中本朝醉尋提等ハ文章最モ美シクシテ、廣ク世ニ行ハレタリ。今其ノ一節ヲ左ニ擧ゲン、コハ或諸侯ノ侍女香晒ト云フ者、主人ノ勘氣ヲ蒙リテ故鄕ナル山家ニ歸ルコトヲ叙シタル者ナリ。

「實ニ『世の中に在る人と住み家とは、淀みに浮ぶ海藻の且消え且結びて久しく留ることを無し。』と云へるぞ宜なりける。香晒は十歲の時故鄕を離れ僅に九年を過きぬれども、今爰に來て見れば人も住み家も變れるが多く、常に遊び處とせし山守の家も無くなりて叢となり、麻畠にて在りし處は却りて人の家居となる。若菜摘みたる野も陷ち凹みて沼となり、營迫ひたる津も水あせて岡となれり。唯昔に變らぬは、辻堂の石地藏、谷川の水音のみなり。折しも夕日傾きて彩る雲の旅衣、水に寫りて趣けば、笠に載く

木の陰も消は行く秋の蟬しぐれ、塒に迷ふ群雀も、吾が身の上とあはれなり。」

第二十三課　馬琴

馬琴ハ姓名ヲ瀧澤清左衛門ト云ヒテ江戸ノ人ナリ。幼キヨリ讀書ヲ好ミ、殊ニ喜ヒテ小說ヲ讀ミ、殆晝夜ヲ別タザリキ。長ズルニ及ヒテ身ノ長六尺ニ餘リ、筋骨逞シク儼然タル一個ノ力士ナリシカバ、相撲ノ長其ノ骨格ヲ好シ、慇ニ相撲トナランコトヲ勸メシカドモ聽カズ。初仕官シテ吏トナリ、幾バクモ

ナク之ヲ辭シテ醫ヲ學ヒ又儒ヲ學ヒ、遂ニ已レガ最モ好ム所ノ小說家タラント欲シ、山東京傳ニ師トシ事ヘタリ。京傳其ノ才ヲ賞シ「今ヨリ二三十年ノ後、世復老夫ヲ說ク者ナキニ至ラン。」ト云ヒキ。

馬琴果シテ小說ノ大家トナリ、其ノ著述ニ從事スルコト六十年、部數殆三百ニ近シ。就中最モ世ニ著レタル者ハ里見八犬傳ニシテ、其ノ卷數百ニ餘リ、之ヲ著述スルニ前後二十八年ノ星霜ヲ費セリ。馬琴ノ小說ハ總ベテ雄壯活潑ニシテ、又能ク悲シキコト可笑シキコトヲ交ヘ、加フルニ文章美シク語調宜シ

カリケレバ、讀ム者中途ニシテ卷ヲ釋クコト能ハザルニ至レリ。

馬琴若キトキハ剛情ニシテ人ノ諫ヲ聽カズ、品行磊落ニシテ血氣ニ早ルコト多カリシガ、長ズルニ及ビ纔然トシテ心ヲ改メ、品行方正ノ君子トナレリ。最モ讀書ニ耽リ暇アルトキハ或藏書家ノ書庫ニ入リテ終日書卷ヲ放タズ。故ニ和漢諸學ノ書ニ於テ知ラザル所ナク、當時所謂雜學者ノ隨一ナリキ。晩年ニ目ヲ失ヒシモ、著述スルコト怠ラズ、亡兒ノ妻ニ口授シテ之ヲ筆記セシメタリト云フ。

第二十四課　春日田舍の景

目に麗しき梅の花、
一重は散りて八重はなほ
香にこそにほへ。路の邊の
木の芽若草春めきて
右も左も叢參の
畑より昇る舞ひ雲雀、
藪鶯もよそならぬ
調は高き里神樂、

今日しも初午なりければ、
稲荷祭も天晴る
鄙にしあれば、ちはやふる
神を齋きの注連懸、
其の村ごとに賑しき
人の往き來も常に增す。
里の總角打ち群れて
他かぬ太鼓の音さへも
初霜かと疑はる。

高等小學 新體讀本 巻六終

明治廿七年九月廿六日印刷
仝 年九月廿九日發行
仝 年十一月三日訂正再版印刷
仝 年十一月六日發行

定價
一卷金拾五錢六厘　二卷金拾六錢八厘
三卷金拾八錢　四卷金拾八錢
五卷金拾九錢貳厘　六卷金貳拾錢四厘
七卷金廿壹錢六厘　八卷金廿壹錢六厘

（高新体）

金港堂書籍株式會社編輯所編輯

東京市日本橋區本町三丁目十七番地
發行兼印刷者　金港堂書籍株式會社
東京市下谷區龍泉寺町四百十番地
右社長
代表者　原亮三郎

賣捌所　各府縣特約販賣所

販權所有

此の書の字解

高等小學 新體讀本字解

全一冊 定價金貳拾六錢